

## 1 , 災害は地域を壊す

災害は、地震、津波、落雷、風水害など様々な要因により発生する。島根県では、地震や津波による災害の危険性は低いと言われているが、水害や土砂災害については、幾度となく町や村を襲い、そのたびに多くの人命や田畑などの財産を失ってきた。

平地が少なく急流の川が多い中山間地域は、特に水害や土砂災害の発生確率も高い。異常気象により風水害が多発する中、整備に時間のかかる防災から減災に時代に入ったと言われて久しい。

そんな中、平成25年夏に、島根県西部を数回にわたり水害が襲った。昭和58年の大水害から30年目という節目の年であった。「災害は忘れた頃にやってくる」という寺田寅彦の言葉のとおりとなった。

地震、津波、洪水などは、人が被害を受けて初めて、災害となる。最高の防災は、危険回避である。人が危険な川縁や崖や谷の直下で生活しなければ、災害に遭う危険性は著しく少なくなる。当たり前のことであるが、しかし、人は災害に遭う場所に住むことが多い。

防災部会では、30年ぶりに大災害に遭遇した邑南町日貫の災害現場を訪ね、洪水に対する防災の課題を考えることとした。

## 2 , 災害に立ち向かう

災害から人々を守るためにはどうするのか。

まず言葉から入ってみる。いろいろな災難から身を守るための言葉をあげると、「災害を退ける(防災)」、「災害を避ける(減災)」がある。

災害に強い地域にするために、防災工事を行う。

昭和58年の大水害で日貫地区は大きな被害を受けた。日貫川が氾濫したからである。そのため、災害復旧助成事業を取り入れ、計画雨量は290mmとし、1/60の超過確率で日貫川の河川改修を進めた。(写真1は河川工事完成直後)



図1 昭和58年災害を報じる新聞  
山陰中央新報社 災害グラフィアより



写真1 復旧された日貫川  
島根県作成パンフレットより

平成25年の大水害では、日貫川はほとんど氾濫せず、地区の防災力の強さを示した。

図2は、昭和58年災害復旧説明用のパンフレットから引用した。写真2と3は、平成25年災害後の状況である。

防災部会のヒアリングでは、「川は大丈夫だった。最高水位も護岸天端で止まった。うまく設計されたので、助かった。」「今回の災害では、谷からの鉄砲水で地区が浸かった。砂防ダムを造っていない谷は弱い。」自治会長たちは、口をそろえて説明された。

災害に立ち向かうには、河川改修や砂防ダムの整備などの施設整備は、防災には大きな効果があることを改めて感じた。

しかし、気になることもあった。日貫川の堤防は、ほとんど壊れなかったが、数力所、護岸が損傷している箇所があった。谷からの流出水で、堤防の裏が洗掘されたものや水衝部での護岸が壊れていた。自然の驚異に対抗するためには、十分な現地調査が必要だと痛感した。

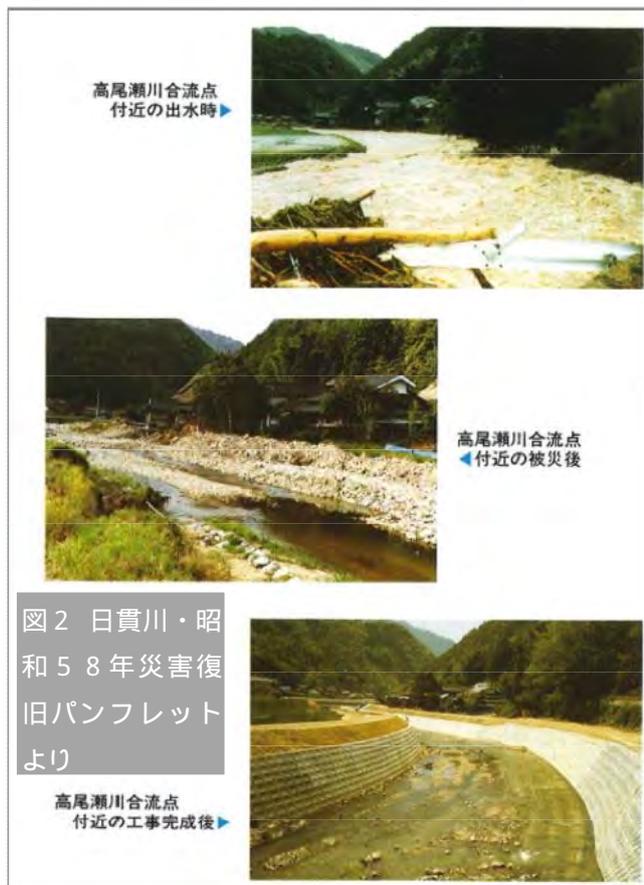


写真2・3 日貫川 平成25年災害後状況



写真4 日貫地区避難場所(公民館)

しかし、災害時の避難方法には、少し心配なことがあった。

避難命令が出たのは、真夜中。消防団の皆さんが力を合わせて、避難場所となっている公民館に地区住民を事故なく避難させた。

高齢者などの一部の人は、避難できなかったと説明を受けたが、自宅の安全な場所に避難したとのことであった。

今回避難したの公民館は、町の中心部から2キ

口以上離れている。避難路を熟知している消防団の皆さんだから、うまく避難できたことかもしれない。事故なく避難できたのは、運がよかったと言っても過言ではないと思った。

### 3, 過疎の町 邑南町日貫

日貫地区は、室町時代からある古い地名である。かつては、たたらによる製鉄業が盛んで、最盛期には10力以上の鋤(ろ)で、製鉄を行い、明治の初めには368戸・人口は1621人との記録がある。かつての日貫村は、昭和30年に周辺の村と合併し石見町となったが、そのときは、285戸・人口は952人とある。現在は、209戸・人口は543人であり、最盛期と比較すると人口は三分の一に激減している過疎の村である。

人口減少と高齢化が進む日貫地区では、消防団の団員も若者が少なくなり、昭和58年の災害時には先頭となって消防団で災害対応をした皆さんも高齢者となった。少子高齢化・人口減少が進む中山間地域では、集中豪雨時の避難は、大きな課題である。

### 4, 大元神楽の里「日貫」



写真5 大元神楽・重要無形文化財

綱貫

この地方で、昔からの神楽の形が一番残されているのは、大元神楽と言われている。現在、邑南町を中心に21社中によって伝統の舞が継承されているが、日貫にはそのうち5つの社中が活動を続けている。

八調子の神楽が主流の石見地方で、テンポが緩やかな六調子の神楽で、国の重要無形文化財に指定されている。

高齢化と人口減少が進む中で、この伝統的神楽を守り伝えるためには、安全で安心して暮らすことができるよう、日貫地区の防災力を高める必要がある。

しかし、日貫地区は、地形から見ても防災上安全な土地とはいえない。このような中で、大元神楽の伝統を守り伝える「地域のこし」を進める必要がある。

### 5, 邑を残す・文化を守るための技「いなす」

天気予報の精度は、大幅に上がってきたが、スポット的な集中豪雨は予測することは困難である。突然降る豪雨に対し、的確な避難をすることも難しい。特に、夜間、集中豪雨の続く中、避難所まで避難することは、危険きわまる。

相撲の技で「いなす」という技がある。相手が突進してくるのを急に躲(かわ)して、相手の体勢を崩すことである。災害という相手からのぶちかましを、正面から受けとめるためには、強固な肉体が必要である。これは、河川改修などのハードな防災体制と同様に容易なことではない。

減災で最も大切なことは、適切な避難である。相撲にたとえるとどんな手になるだろうか。小技を多用し、土俵際で踏ん張ることかもしれない。

しかし、中山間地が災害に備えるためには、高齢化と人口減少というボディブローに耐えなければならない。足の弱った高齢者は、避難所までの避難は容易ではない。自宅が避難所になれば一

番である。それが無理なら、近くに避難所があれば助かる。

東北弁の防災用語に「津波てんでんこ」という言葉がある。これは、災害時のことをあらかじめ考え、ばらばらになったら自分だけでも逃げるといった約束事である。互いを探して共倒れすることを防ぐためのルールである。高齢者のような災害弱者が逃げることに手間取った時はどうするのか。私は、災害を躲す(かわす)ことができればと考えている。相撲で言う「いなす」である。

## 6, 洪水による水害や土石流から身を守る ー津波防災に学ぶー

豪雨の中、避難所まで避難することは危険が多い。特に高齢者などの災害弱者にとって、避難場所は、できるだけ近い場所がよい。夜間の避難は、たとえ自動車であっても危険である。自宅が避難場所であることが最も望ましい。

現在、大津波に対し、避難する高台が無い地区では、津波タワーの建設が進められている。

この津波タワーを日貫地区でも活用できないだろうか。

河川改修が終わっている日貫地区の主な災害は、谷からの土石流が最も大きな危険因子である。小規模な河川氾濫による洪水の危険もないとはいえない。

すべての谷からの濁流や土石流を防ぐための砂防工事を緊急に進めるためには、とうてい予算が足りないのは明白である。

このままでは、災害のたびに邑が壊れ、伝統芸能の大元神楽の伝承も難しくなる。

災害を躲す(かわす)方法として、土石流タワーは有効ではないだろうかと考えている。

急斜面の山が深層崩壊したときは、崩壊土砂量も莫大なものであろうが、深層崩壊はそう簡単に起きるものではない。今回の災害時に日貫地区で町中を流れた土石流は、写真3の避難タワー程度の規模で十分だと思ふ。

普段は、屋根をつけて大元神楽の演舞場にしてもよい。デイサービス施設を整備してもおもしろいと思う。鉄骨で床を上げるだけであるから、予算も少なく済み、設置するまでの工期も短い。日常生活で、足の不自由な高齢者が、階段やスロープを使うことは、困難であるなら、油圧式のエレベータを整備することも可能である。(図3)

家を改築するとき、床下を上げるための、補助金を考えてもよいのではないか。高齢者のためのバリアフリーのための改築費用の補助もあるのだから、実現は可能だと思ふ。

避難タワーのように床の高い家、それが実現すれば、自宅が避難場所になることになり、近所の高齢者も受け入れることができる。夜間、豪雨の中、遠くの避難場所まで避難することがなくなることで、災害を躲す(かわす)ことができる。(以上)



写真6 津波タワー

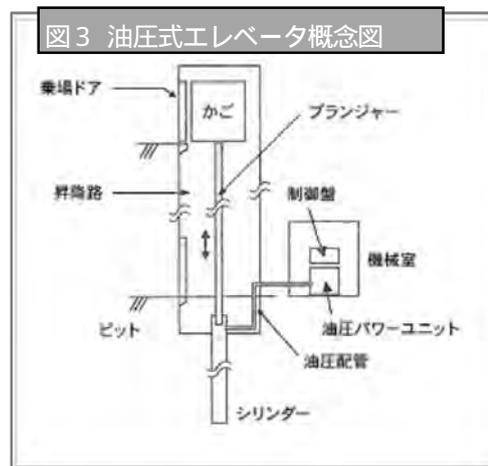


図3 油圧式エレベータ概念図